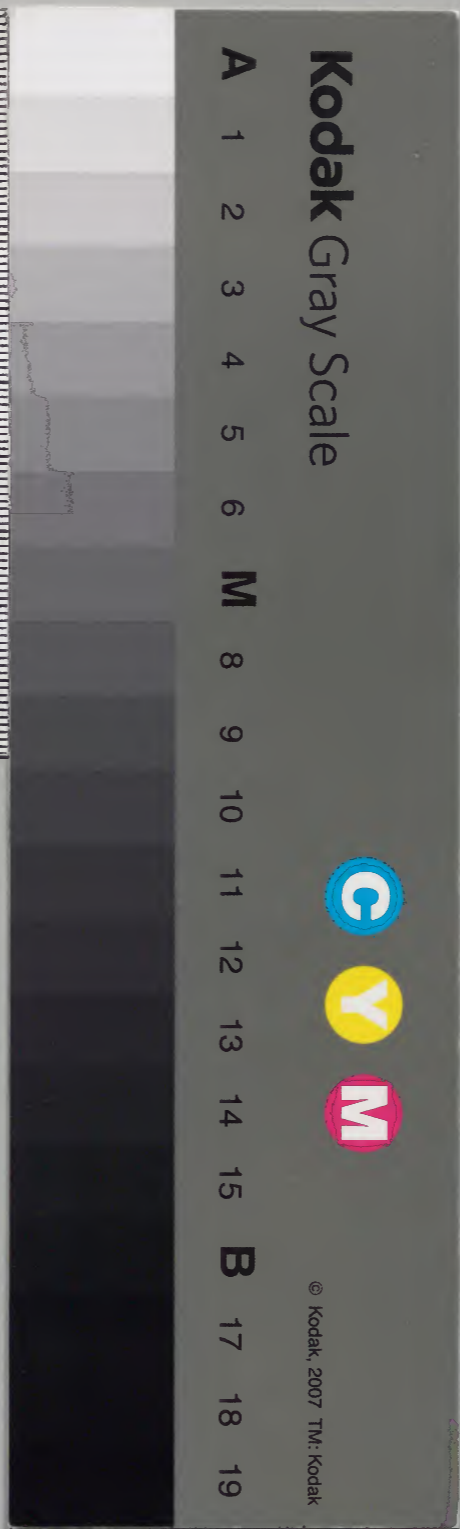


雅言集覽見續編あ六

				和書門
一	二	三	四	
五	四	〇	四	
冊	架	函	號	類

庫文閣内					
八	一	八			和
函	五	四			書
二	五	四			
架	冊	號	類		

内閣文庫	
番號	和 18444
冊數	15 (11)
函號	208 39





雅言集覽續編卷之十六

保田光則著

あ
の
歌

あ
た
り

新
古



夏

むす
秋の夕つゆ

万

八
春のくにあま

万
十二上廿八又

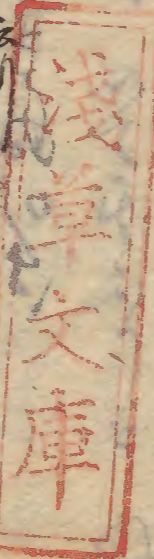
心
拍又

新
古

君
うあし
あつ

た
ら
伊弉山
雪
形
た
な
い
り
百
八
ふ
ち
と
り

ほとり
と
云
俗
尔
也



あたりひ

大鏡一

わらふをまじして尚り具に侍りてまじの
くちをしうも急なり侍り守ぬると

あたのも

祭 恰をよめり當哉の女也畧甚
よく似しる子を云詞也

万 十九上廿八ウ

わらせこりさけてもたるほく
かま安多可毛にりり喜ささぬがは

あたけ

他気

朝見

万三十三

今更のほあへけもいひのめい

まもとも思ーながら

同

万四十一

まよしうちあだ

けすきとる人の年つかりけりまにりうよらや
るみあつらん 若菜 上十才 以てはありてぬ

あぶけこそいと好るめづし

あたある

玉警方

カウ

はげんよあつまれていふはあめ

うきせんもはせくちんま

あしは

惜

燕鏡

あしはしやえそりお崎の基れむたのう

むる人もなきてちりたる。柏木ヨサオの心あは
うたはしうあはらしとおほしやどしよ

あたま寸

雄畧紀四ウ 天皇興スミタリ一夜而眠 同ユオ朕興スミタリ一宵

而眠云々此娘子以清身意奉興スミタリ一宵云々况興
終宵而妾生疑也

畧 ちら寸意也

あたま寸

万十九下八 下書をほろにふとあはしう神也

今日に尋りてあはしうの如く

あたま寸

初学 下終十ウ海にあはしう浪とくみかく

の幾由も立をい下り **古** 恋四 是こひたの身割や

ハまわす山川の浅き淵をたあたまはら浪なみ **金**

恋 舌にさく言志の浪のあはしう浪ハ魚イサ心袖のぬ

れゆらぬすれ

あたま何

琴 いたつらぬきに云ふ **按** 万多に他

又異の字を訓り世管方尔化又浪など

の字を訓り今も他の字をさす人多けれと万の

他を他と後世者語れを因循ト今亦朱也

むむと怪するハ即徒イダシの意とす也然れハあたま

としを祝や

玉霞

十八才

あぶくらのちとくは

ちりやすき露れ消やすり或は人の福にあは

かことをいし詞わらるるを近世人の月日をあぶ

にすぶ見たなきをいつらにとりまきふつうよひに

こと也といひ

古

妻上又

心物

十七条あり

なりと名にこそたてれ梅を手にすれぬくもま

ちけり **万** 十二下 **サ** あり人れやねちあたる

せむとよそとものある大和のあはれと云はの人也

詞

推上

待賢門院坂河

あり人ハ

よひの月わぬやむとそとをこえねむよ

五

あすはあはれに月日や

思ひしうきも今日も

吉

お名大に子

里のうきはれおれおる苗なれとあたふ

ならぬたのみとそま

心物

サ一条あり

世ありけり月をあたる英りそとや

古

物名

豊之

家いけ

心物

志立

をあらわなる物といふけり

あはれけり

あぶくらへ

伊物

一糸

けりあはれとる敷とらるる花と何れや

言 ぞふまををゆらしあぶは一たえにける男
女の思ひあふせしるぬ

あだり何

一ハ助棒上云ハマろ一脚抄志家の
しめ打合なく詞の中に置くも也

たろくニ一「ちあのおや縁」のまいたに
打合も也 **新** 有上 あいしあひた

そま一このうれすみあひくゆめたのち
万十上 **サ** あいしあひ君にあ一ち松村も他村

は今こそわらめ **同** 十一上 **サニ** 天雲乃よりあひ

をいあま守り由異自枕されいもうのや **紀** 廿
我難異國心在断金

あだめく

材 をめく也 **紀** 放逸字を訓す

帛

あたか

暖を訓り

万 志らぬひの筑紫糸綿ハ身につけてゆまた冬

まねとあたかに見え也

あたらまる

栄玉 鶴林 あたらせのひて

あたむ

八衢亦四段とセリ

万ニ 歌見りる

あたふ

四段

神代記

あたきぬらふ

夫木

廿六 言語

相様 いづれをうまつるれ (心) 心にあたはぬりの
おほくもまき

あたなる

四段

神代記

上廿六

一昏曰云々汝若不有行賊之心者

あたる

四段

古

春のひけ先にあたる家なれと路の雪をぬえ

あひ

拾

恋三ころあまし 朝日にあひ方白

あはれあまの今いかなむのもしも

あたこと

新古

恋五 あること此あにわくあはれ消ふ

あはるあまや人れあらん

あたらふ

万一四十一 長。神龜也新代と泉の河に云く畧解と
新代ハ新京ハは代志ありの寸を云と云り 同三下四
九 昔思好古の志白紙左ハ成極新世に共好ると云
畧解に新世ハ一卷の巻原の新京を新代と云
めるに云く久述の新京の事と云ふハ云れり
宣長ハ此世と云也卷ナ

自月ハありありにあひこれと云あるも新代ハ
多 志重の事也と云く此説然るやと云り

同六四三 新世乃事爾之有者皇之引乃真雨
真荷畧解新世ハ只代と云る成る既ハ心ナリ

同十三五 石うぬのこけむ寸をに新夜の好去通ハ

んり計爰に凡忽こそ云く畧解夜ハ代の借字

あれつく

玉草間 十一三十九 あれハ春任をいふ

言也 賀茂の糸をほつれといふも仕
術ハ神功紀に撞賢木嚴之御魂とある

撞と曰くていつまのしを省けらるるナリ されハあれつ
かむをよとあとい萬原をいふナリ 持統天皇に
いつりつる女をいふ也ののあれをよとあとい合
ナリ 萬一 萬原の大まつらハあれ術哉

同六八十年ハあれ術之つ、天の下志あり

類聚國史 天長八年十二月云く皇大神乃阿礼
予止賣小内親王齡毛云く代尔時子女王子ト食定

豆進狀予云し 三代実録 貞觀九年二月廿四日云
告文尔敦子内親王子卜定天阿礼乎度女尔進狀
予云く

あそ

畧解

あそハ淺くあて君の心の浅い

万四

サ三
エサ三

艸枕旅をあらしと思ひつゝ君ハありしと安

蕪蕪尔はかつハハハれも

あそバあそ

今昔 十四

乳母ハはく養君をあそばる

まうつるに

あそひのま

万三下三

よのオれあそひのまにすあ

は

あそひ

桐

字十八オ ひとをいしうおはね遊ひるにん

れか〜思ふるの

あそひ

万三下三

よのオれあそひのまにす

ふ〜ハ破突者にあつぬ

同

月よ

川の上清し心さこころにゆくもとあまのあそびてゆ

か那 **因** 九十五麻呂 古しこのはしこす人の

あそびげし **し** 神のかりみれとあうぬくも

六帖 大原也 **堰** せうぬの氷山に及びて多ハ

あそびてゆらん

○音楽をいふハ

○只歌をいふハ **つあ** 四十六条 **しり**

ちりて云い古き歌をいふは **つあ** と云なり

華礼のまじれ **つあ** 公のまじれ **つあ** 公のまじれ

云う如

あそぶ

玉霞 廿八方 今の人此文に吉野は物

ふ **つあ** 彼に相ふなるこのく **あそぶ** 漢文

の遊字よりうつれる **つあ** 也 **つあ** 也 **つあ** 也

る **つあ** 又人の子弟にぬ **つあ** 物 **つあ** 物 **つあ** 物

某大人の門下 **つあ** 也 **つあ** 也 **つあ** 也 **つあ** 也

心は **つあ** 門 **つあ** 也 **つあ** 也 **つあ** 也 **つあ** 也

文字のまじ **つあ** 也 **つあ** 也 **つあ** 也 **つあ** 也

多 **つあ** 也 **つあ** 也 **つあ** 也 **つあ** 也

あそぶ

記傳 三十七ノ二十九ノ **あそぶ** 也 **あそぶ** 也

省 **あそぶ** 也 **あそぶ** 也 **あそぶ** 也 **あそぶ** 也

て **あそぶ** 也 **あそぶ** 也 **あそぶ** 也 **あそぶ** 也

朝臣と書て姓の尸カミと云ふものなり。注書紀釋云朝臣、帝王相親之詞と云り。[禁] 私記亦我身アカミに副ツカサの多と云り。[独断] に公卿待中尚脊衣帛而朝スル曰朝臣。諸

管校尉將大夫以下亦為朝臣と云ふなり。[官位問答] に昔八六位の者も姓につけて朝臣と書り。かゝる後鳥

羽院より後ハ禁制也と云ふ。上野國多胡郡碑に左大臣正二位石上尊。右大臣正二位藤原尊とのけり。はあ

そんのみあを略看せしなり。典侍ちの各の下に朝臣とも書り。

[古今餘材抄] 三 藤原よるあのかの朝臣の系或抄に女四臣志つれ。朝臣といふとあれと

史傳にハ四品より收と朝臣宿稱をよる。[古今

打聞] 春下。同上条以下に典侍因香朝臣とも書典侍者四位なり。姓カミを下に書也。万葉ふと此集は四位の

人ハ必然志るなり。古は女もかく志る也。有例也。氏姓各とつらぬき。ハ昔は母位を友おしむ。付

[古] 春下 典侍給子朝臣

[あつまり] 古

[今昔] 十一 十三 古

大長屋(海)より集余ふりては

[あつかり] 四段。預りより

古

古

古

古

古

古

古

古

古

古

夕コサ十男

みき **権**

夕見の宿の多し、権光尔仰せつけて信を
あまのつらぬにうつりし世俗を、権光のまゝの
とりよに因り、後江ハ世の心ひとも也

あつる

あたらするの跡の世俗にも、下位
権に、あてるるとしよ

拾別 忠見

五孫尔に、あてしと、こひ一人
そせあふら、は旅に、あてける

あつる

須コサ一

まゝなれむつひ、あてちくも

にちりつ、あつるひ、あてちくも、あてちくも、あてちくも

のれハ **落雲**

朽岸ニ、今にむけの、あてちくも

てちりつ、あつるひ、あてちくも

早蕨

コサ

心の内ハ、あつるひ、あてちくも、あてちくも

あつるひ、あつるひ、あつるひ、あつるひ

まゝなれむつひ、あてちくも

推

コサ

兵刃の、あつるひ、あてちくも、あてちくも

あつるひ、あつるひ、あつるひ、あつるひ

角

コサ

すけの、あつるひ、あてちくも、あてちくも

あつるひ、あつるひ、あつるひ、あつるひ

あつるひ、あつるひ、あつるひ、あつるひ

あつるひ、あつるひ、あつるひ、あつるひ

あつるひ、あつるひ、あつるひ、あつるひ

あつるひ、あつるひ、あつるひ、あつるひ

あつるひ、あつるひ、あつるひ、あつるひ

まはるかにうひあひのり

東巻

伊予後おは姫

君とついでかしくくまのまをうたのまなまど
すめしおふお六人あけられいさかひにこのあつ
うひをしくくことを人さうひ痛くころ心のま
げせはあつたにいつらう物おをを思いつ
うそりすぐれを西たしき程は志をうたは
ええにし衆とゆくれお母君いさひあつらひける
同 四四十二 ちれいまふもてなしめらひいしげお
美のりまをうつはしうのそつひたるげおやえは
あうらたのまのいささぞおよりたるおこし
げおひらにまをうつけならぬ大おのえ程をん

おひ更にはれおあましなどこのうらこいおあひあ

つうせし

同

四四五

志か障らひしらんをいとを

しとつて

形あつりあは年以傷さらす

足おひさおあゆめくあつたしと

同

四四

廿ねのあつておを智に又なまおあまをひいさ

まをろくまよまあしくくまをまをさうさ

なうら

同

四四七

自らゆつたさあ

りんとつひよりおまのまをさうさうたあ

あまにうらそ人とひとしくこのを思ひあわ

らる

同

四四八

おろつら母ん若し

あひあつらひ程のまにかひあうもてあ

あづまあそび

古今栄雅抄 十卷 娯楽事あり

あづまあそび

大和舞の事と云はる

河舞の音ろと漢に夫人は降りて舞ひけり
まを福しとあはる也あつまあそびは
そを福しとあはる也と云ふ

あづなひのつこ

神功紀 ナリ 如是惟謂阿豆那比之眾

あつ 槎 沖の福の事と云ふは也と云ふ

ハ物造りてハナリ

あつあひ

あつれ

を阿豆加布と云ふあり 詔 熱 神代紀 上十一才 熱 煥 惱 字鏡 唱

運當遷 顯宗紀 羸弱 雄畧紀 遺病 弥留 靈

あつ云

熱困の家と云ふ 持統紀

あづま

凡あづまと云ふハ記中 五十一 倭建命云々故登立其坂三歎詔

云阿豆麻波夜故号其國謂阿豆麻也と有同記 傳廿七 八十二 其國ハ細ウに云ハるは國を捨て

あなひ

例

うゝる事ハ心にと人

間よりして俗字の字令をよけんに

申れり下あひなる心と云ふ同

万四十一才

あなひの心と云ふ一十四歳と云ふ事なり

とさりけなくしてあなひといふ

日記上

同廿六 立寄ててあなひの心と云ふ事なり

あたり臨ふへきとあなひせきせけれハは月

の十九日と云ふて

同

よことこのときかせに

をのこをせしめてあなひせきせけるなり

玉葛

三九ウ 葛のきりしを枕ふくあなひ

りんをきりしを枕ふくあなひの

はつきにて

あなひ

栞

和名抄に柱麻柱を並舉する是

續日本紀

宣命阿奈比奉 同廿三 王臣等乃相

穴北奉利相杖奉 年事依之仰賜此

あなた

あなのひの心と云ふ事なり

新拾

たのひの心と云ふ事なり

たのひの心と云ふ事なり

古

柱上 あなひ

了月つらうらふ山もとはあなつたおめえとひひ
つらうらふ山もとはあなつたおめえとひひ

あなづる

静明紀

入畝傍山因以探山

欽明

紀 考 叢 古 今

字 鏡

叢 阿 奈 久

留 栄花

うらみのるゑル 帯刀や流石やちと

いふものともよるひるさうわらひ 帯刀や流石やちと

つらうらふ山もとはあなつたおめえとひひ

あなづる

四段 采

痛につらしとすらのさや

靈異記 尔菱を刺紀尔輕字を

訓 あなづるといふも同

山家

上 思守

尔あ那つる尔くすわ川う那 十月のるゑる
あなづる 紫或る日池 ちをさきしとくのお

あなづる ちをさきしとくのお

あなづる

四段 あなづるを同

字 鏡

八十一 黷 安奈止留

同 九 侮 同

あなづる

あなづる

神代葦牙

あなハ棟取按に

出アラと俚す。にハ意字の意に

あなづる ちをさきしとくのお

ありちぢ

義見上

壬生

ありちぢをうかつすか下にとす火に麻

のまとのまろくまろくまろく

ありだつ

俚言と曰く荒立を云

ありあ

源氏君

ありだつと云はるは浪にひつは

ありねとせけん心ををひつうくうららぬ

あり何

ありと云はる芝状の鯛ををひ

あり何と云はる吉事青雲と云

新也亦下二段にあれありた云荒暴麻などの字

を訓

ありた云荒暴麻などの字

○野原ありるハ

万

一

早

まふさのりる荒野

ありあれとありふく此邊に君の形をいふに

略解云ありたハ荒山と云う如く人氣をいふを

あり

同

十四上

信濃なる須賀村ありたに

ありた云ありたのりる

家集

ありあぬんすもれつもふところなるありた

ありたのりるありたのりるありたのりる

○ふにありるハ

万

三上

四

大君の神にあり

ありたのりるありたのりるありたのりる

三十八 長哥 こもりくれ初めの山ありた

ありき山嵐をさす

ありき 集に下風をあどりしものあるはたろ

と云田孫楓云嵐山下ヨリ出ル風也よて山下に

書く文選注に嵐山風也と云ふなり

葉集に冬風と書きありしものあると

ハ冬のもよむし物と云ふ人もあれと云ふなり

○春ふらある

ものよそのいさかの山嵐はすわく春の白雪

玉ふ 春下 庭の西の垣に定むる方ふ

嵐に軽きもの白雪

あり 芝状荒をよめ

新古 旅心を別て心もとけぬとも統ありとな

うけるおれし波 玉ふ 雑一為兼

物思ひあけなほけぬしと海の舟地ありくな

うきを柱のころら

ありま 荒る者をいふ

總角 早一才 あります

ありまのあたらむ

何にソそ年へのうらんちもことしたるに

あらたまる

四段

後 秋下 しのよのこふるのしくもあまひを

ほしうごにこそあらたまひけられ

あどりどろ

あやひ抄詠属にもお誂によ

うるき 金葉 秋くまもあふ

鏡とみゆる月影ふさううつらぬ人のあらし

那

あらる

被着たう 著少集 五宗家少方

留るものたえハ命の海をむと思ひ

しうともあられけりうをを 拾玉 四 吟うもあ

風は木のそふれ何とそあられぬ世にも松あ

らるん

あらかの

押取詞也豫字を訓りのねてと因

まかされと二の詞をまぬとあうもの

万 六ノ十九 本 いちおんしや〜あらしんと豫兼

〜ま〜せん

あらしの

柔 筆をよめ、暴逆の義也

字鏡ふ諱をよめり

後 志三

藤原滋幹

ちまもゆるる神引うけ

契下しともしもやーくあらかみ那やの因 志五

初書あらかりきとと怨むけれ 志六

ちまもゆるる上つれあやうらにこそあ

うひいつとをいりあやれ

あらたなる

俗もいり新を訓い生来
るの氣必し今とあらぬ物

の新ふ出られりや

玉音

十三の 佛の因

ホハもつせちえ日のかのけにあらたなる志

る一解あつと 雨夜の池ふあらたに神

のちとつものれりい云白紙神の形を那

ハ一ををうまねかーとちうと後り

今昔

丹 十二下 六十五ウ

一とく持チ奉ん所法花経ハ聖験新

シタニ 病ニ煩フ人

あらざる

中ニ段 續紀 宜命尔荒 備 志七
ハ俗之の例也 記 下 奥伊佐知

流とまはし同 八下三

万 四上 つらーとみいもこねハあらざる

蒼 振サミをみるうちり 志八

同 二 早三

鳴れ太池のう なるはきあらしり

あらひなやちうそ忍あらしり

同 四十四

ちまもゆるる 鳴れもあらしり

那 由りそ自のほろを 是らのあらび、跡く
なろうと云ふ

あらてくむ

垣をあらり とも然たるはま
て 肝要抄 **吳** くに垣をたも也

堀河太郎

百首頭件 あらてくむ賦う垣ぬの

お鳥のうもなまきりきりきり

六百

番

夕顔 頭眼 ちのつうら情をえぬ

あらてくむ 堀河外西の夕顔の志那
なまきりあらてくむをいふとそを著 たりてくむ

大中すあらぬ云くむたも也

あらす

オのあれたんのなまきりあらす
ぬ由也 中庸 不誠 在物に大受

赤心不在ハ見れた尼忌す云ふ

大和抄一

あらすこそけし ぬもりももほ忘のけふふ山あ

そ 諸やしぬを

源氏

あまにぬあらす

るはしきしそあまのけでぬを花す

あらす

様 俗言にソヤ何なりでぬあらす
ま也

空

写九才 心とにくくそあらすととも

ぞとて

あらし守

非の字のまぬハそでないと怪す

古

素来ぬと人いふと由字例なるぬわき

り「あらし」とを画ふ

案

五四九

いざのしき

のは似ほそ素来なるつらそとのありにあらぶ
るつらりとあられて

あらしらる

下ニ改あられと同

記

中逃散

をいげあらしけぬと訓又

紀

散去あらしけぬ又廿六尔散卒をあらけたる

いらしと訓り

あらしたま

猛り神靈を申す

神功

紀五神有海曰私魂服玉

身而守寿命荒魂為先鋒而導師船云々既而則
焉荒魂為軍先鋒請和魂為玉船鎮同八我荒
魂令祭まゝ為祭荒魂之主同九我之荒魂不可
近皇后記中六十二即以墨江大神之荒御魂為
國守神而祭鎮云々

あらし

素の字をよめ素来の意也

大略の義に「あらし」の俗言なり

素然 素らつとくあらしの素らゆい

つは素らつとくあらしの素らゆい
石代集 権

ありれ松原

ありく松原

畧 夏ころ
ハありれ

松原詞と神代紀をちのころのありくまじり
とつるハ山城のころち川のあちふにあり
まじりる松原もまじれとらとほはハ
万一五十二 十六 ちぬうつありき松原伝の志の
あしひをよめとまじれとあうぬのめ

あむす

四段 念浴也 万 十六 十四 三
にあむさる

あむる

中二段 浴也

古今

つくく甘あそんそ云々

枕草紙

ぬおきてあむる也云々 万 十六 十四 一
なよにすわうもいふ松原のひ松原うじん
まのにおねはむむ 土佐日記 誦 男女

これうれあまこちとそん 拾 権秋閃
昔 七月七日女川水あまこちなるは

あんない

上あないと念をえん 経 因
意の舟ひうらハ 今昔 十六 分

才家に打入て然をういしとさひけれさ
あんないをーら寸 因 十五 十七 分
まにういしとあまの心を知すしとあまの

あく

下二改明を訓り自然亦し和力
ほもいりり只自然亦しつる

古旅

夕月夜お月つらめまをむく

あつこの浦あけてこそみめ

相壺

ナ

あつこの浦あけてこそみめ

拾

一

人まゝ

あつこの浦あけてこそみめ

あけんあ

あつこの浦あけてこそみめ

○これ用カおつる

新古

復たをさしあく志

川のまゝあけつるのまゝあけつる

ほつとつる

二物

中

をさす

れ多世承あつこの浦あけてこそみめ

そつとつる

あやばり

あな

記傳 廿三
まゝ紀に照

織漢織とて此を二人あせしれ

宮の一人あつて漢織と云ふ即ち織の素也

すれハ号織を或ハ漢織と云ふ

て別に奉られつる

ハ即漢織と云ふ即ち服の事なり

七

年吳王於是與工女兄媛弟媛吳織穴織

同十四年身狹村主青等共吳國使

あやめのる

四段 謬誤を訓り又あやめり
六云

後 雜四 新ことにはみ 都 改めたるあやめ

りともあやまりしにともあ人もち **梅枝**

あやのちをえりし 神にうつし 此あ

やまりしとほろりとつらん **大前張 藤母吉**

あやめこはや一夜はよれあひを。あや

りにし。とももたらぬ。ともともす

元月 橋の上上之一六ウ さんをむひ院

いとになく 師 あやまりたる **子あひ**

引と強

あやめの枕

雜木 あやめをかひつりぬて

枕にすま

新六 知家 有漏の身此かしの草蒲此州

枕世ハ旅ゆきをぬ **夫木** 俊成

橋に草蒲の枕うをるもを昔れを **限也**

新續吉 妻心あらにきをててな

村多あやめは流ふあやめの枕 **月清**

上さよ衣こつよに **らぬ** 自ひ草蒲浦を

流ふ **入枕に續千** 旅 前僧 **二** 朝

旅ぬに **ハ** 草蒲に **今**

音 **あひ** かつ

あやまつ

過意誤を訓り字後不謬註註
を訓り

古

三吉の山にさけるけり

のりを白妙りみてくらうるあやまつ

ける **拾** 神あつる也と

けり **万** 十五 三十一
二十三 考 たるか山安夜未_知

けり **世勅** 輕ニ後京極 くらり

あやまつは先代仰さてもあやまつはあや
成程を物よ

あや寸

四段 念出也

うつけ

うつけを ちりてしあや

いん

因 梅屋道志 つかもあや

さしあや

あやなし

又あやなしとのこと **古今集** 三義

俗に詮をいさなきと云ふ

あやなし也 取原おやくさしあや

はれうるあやなし **古** 山あやなしあやなし

後 **後** 一 りりてをうらうらあやなし

あやなし **三** 曲むあやなし

あやなし **三** 曲むあやなし

あやなし **三** 曲むあやなし

あやむら 古今 高 郭

あやむら 衣傷 俊忠 墨條の杖

あやむら 復 けり かのりのりきりたれ

あやむら 貫之集下 けり かのりのりきりたれ

あやむら 軒近 ぎ橋のりつり

あやむら 下二段 悔 じるをり

あやむら 散木 志すもよのり

あやむら 濱松中納言物語 すめりれきり

あやむら 川 志すもよのり

あやむら 志すもよのり

あやむら 志すもよのり

あやむら 志すもよのり

あやむら 志すもよのり

あやむら 志すもよのり

あやむら 志すもよのり

あやむら 志すもよのり

あやむら 志すもよのり

あやむら 志すもよのり

あやむら 志すもよのり

あやむら 志すもよのり

あやむら 志すもよのり

あやむら 志すもよのり

あやむら 志すもよのり

あやむら 志すもよのり

あやむら 志すもよのり

あま

海士。海人たると重此ハ海女て寸ちと
りし又ハ川槍焼業する者ちのこ
つふやくちちと川ちとほそ寸ちとくする若
ちもひつり **万** 五ノ三十一 **あま** する所此
ことと人ハ心とみちほしりえぬ有麻人乃
ことと是ち島川ちの奇也されと是ハ拾置
の例とす **巻** 巻を尾と通し **心** 物
百五糸 ち綾らみのあまを **人** ちみちか
りくはやちとちのまるし **那** **後** 推一
おとよさくちりうし **那** ちをちる人
るあまはすちけり

あま

栞 天足の義 **按** 万葉 天の
原塔すけられハ大君のまいのちハ古
く天 **那** したうと **那**
○ 棟取ちるハ 棟取抄ルおア **心** ち
○ 装の性ちと **心** ち **那** 志ニ **心** ち
天の川 **心** こと **心** ち **心** ち **心** ち **心** ち
ち **心** ち **心** ち **心** ち **心** ち **心** ち
り **心** ち **心** ち **心** ち **心** ち **心** ち
て **心** ち **心** ち **心** ち **心** ち **心** ち
○ **心** ち **心** ち **心** ち **心** ち **心** ち
る **心** ち **心** ち **心** ち **心** ち **心** ち

古々序

本之旅

躬行心得之餘 **続後拾** 志一 西園寺入道

今ハ早人のとらふと成にけり思ふ所の多きものを
新 続古 雜中ノ一ツに限る後世と思ふ社歎
録の心也けれ

あまた

栞 生ノ字ニモ也語亦多を訓
二重三重絶不致を訓 万民亦多致

多きを訓り録白の蒙亦如日絶不致十里を
あまたとすを訓り **按** 亦絶不致の蒙亦也

古 あつれふことをあまたにやほしとや

妻におくれをいとくく **千** あま

くたひやあつれふ水の **今** 八限と云

うけえり **新** 千 少年 亦多

蒙の松もあつれふ君の臣代亦おひうり

多ん **壬** 生 ともすくや久そをのぬそ

ツねのそぬの危もあつれふぬ **新**

古 千すらふる亦多に **あ** れ 象 湯 也 也

多れともや **に** 行 亦 多 **ぬ** **續** 古 妻

允恭天皇 妻 亦 多 亦 此 録 の ひ ち ち ち ち ち

てあつれふ **ぬ** 亦 多 亦 多 **因** 矣

前内大臣 亦 多 亦 多 亦 多 亦 多 亦 多 亦 多

た多とせ **妻** 亦 多 亦 多 **妻** 下

さつれふ **枝** 亦 多 亦 多 亦 多 亦 多 亦 多

此註ありて倒あめいと訓しきをはじり
すすあめの桑と直につけを之と陰はじり
をハ訓天如冠と作しあまオと訓し
をハ姑ふのわくはせ

あまらり

略 扱お初代死火進命
をほのまをりも訓るによ

れハはるらりのを意にけ白雲のふるを
桿のふ々天に進く上る如くんをを
凡て物の造み其のまをすらるるを
きん目し造也そ類そらるのあはく
万十七下 サノ十 長 **みわ** におりもあまらりの

ち(ち)おしあけ安麻骨曾理たぐさくち
山あまらりと

あまらり

催馬楽 あつまやのまやけあまらりのあまら

あつまやのまやけあまらりのあまら

あつまやのまやけあまらりのあまら

あつまやのまやけあまらりのあまら

あつまやのまやけあまらりのあまら

あつまやのまやけあまらりのあまら

あつまやのまやけあまらりのあまら

神ノ所子ノ申す也

記 上ノ一ノ 上件五柱、神者別天神 六月

晦大被 祝詞考中廿八 如此久乃良波天津神

彼 天磐門 手押披 此云云

あまつやしろ

祝詞考 上ノ一ノ 天ツ社國ツ社
神チ言ハ神代亦既に

うと天ツ社國ツ社と定めり

の代亦こそあれ云々 祈年祭 天ツ社國ツ社

登 稱辭 竟奉皇神等能前 木白久 崇神紀

仍定天ツ社國ツ社及神地神

Handwritten notes in the left margin of the right page.

あまつみやごと

大被詞後叙 下初ノ言天
原多々天照大御神の躬延

ししてなりを延し儀式にありては、如くは

延し多々を云 大被詞 如此出波天津宮

事以 此

あまのいはと

あめのいはと 絶傳
十五ノ

天石屋戸ハ必し此ノ美の岩窟亦ハ非志石とハ其

堅固を云るにて天の石位天の石數 鞞を云の

如しそ只司母常ノの教をうく云る成下云と

按 以後ハ只板ノ所を山守ノ所と

とし天の元又天の岩戸の明らちと心あはし神
代死のちまゝし〜轉〜し〜心つらちまゝし

神代紀 上 乃十入于天石窟閑磐戸而幽幽

君鳥 記 上 十三 天石窟閑磐戸而刺許許丹理

坐也 **新拾** 神祇 下 保經覽 思ひ兼

たのりり〜とせし〜天の岩戸閑磐戸

さらま〜し **拾五** 一 曉の星の程に也

た〜くの天の岩戸をあげ初めし〜

新後 妻上 妻上 妻上 妻上 妻上 妻上 妻上 妻上

久方れ岩との明ほの〜**新後** 妻上

上 久方れ天の岩との昔の〜

あむむ妻上しにけり

あまのこ

つるのこ也 **後** 恋六 こそ〜と〜物

り天のとれ明らち〜物おる〜

後 妻上 心つら〜妻上 ぬらん天の

とれ明らちをさす〜もあう那 **拾五**

下 ありつ〜山ひとつおみゆる天の〜

あり守ま〜あり月〜 **初** 妻上 あり

か〜た〜く〜天のとを〜後〜

せ〜り〜けれ **後** 妻上 其のやのな

た如く天のは蔭日のは蔭のりす蔭のりす
生は舎るえまにやるや左の句の波はひんを
たすすををりをもみれいとまの虚空を捨て
つるに、たす出うすすとい候はいつはある出
法はて波天のは蔭と覆ひをるは案震殿あ出
侍しあつちをりせり也万知ふ二天原根放見
れはたまの御壽い長く天皇あまを有も若美
えをそれいと目ことあてあまにほそのは
まのりれ、天原は舎を捨て詔あや又
向あまちよにしかくもづいとま句再出
る後抄あ一つ、衍文あらんといつる然る

まのりれ、天原は舎を捨て詔あや又
向あまちよにしかくもづいとま句再出
る後抄あ一つ、衍文あらんといつる然る

あまのちよ

略 長身あまをまを二
字のち、長く天皇志

りてあまもちよ由也 一万 十三上廿五 長身

うつ、は、天にはあはすまのになああとなえ
こそあまのちよ

あまのちよ

略 天雲よりあまの
ちよをとりし 按に

まのちよ 万 十上六 ちよ麻之

あまのあひかり

〔栞〕

後撰の奇。まゝかた。まゝかた。まゝかた。

眼の世説に就ても修徳海人のまゝかたをよと高宮女市のまゝかたを男者のまゝかたを也
也修徳のまゝかたを修徳のまゝかたを修徳のまゝかたを
鴻のまゝかた

あまぶも

あまぶもに夫をまゝかたの雨を

雨をまゝかたのまゝかたの夫 為相 日をまゝかた

軒窓におぼろふあまぶもよえはもた
らぬまゝかたのまゝかた

〔新六〕

知家 日記にまゝかたのあ

〔新六〕

四辻入道 はらまゝかたのまゝかた

あまぶもよえはもた
らぬまゝかたのまゝかた

あまぶも

〔畧〕 雨の晴方

〔万十上〕 三十四

雨間用て國見もせんまゝ

まゝかたのまゝかたはちりにけんま

あまぶも

動きぬき岩のけんもくをん少女
の袖に持たせしむる **六帖** 二上 あまの夜
あまの夜 **六帖** 二上 あまの夜
思ふぬくに **六帖** 二上 あまの夜
あまの夜 **六帖** 二上 あまの夜
思ふぬくに **六帖** 二上 あまの夜
あまの夜 **六帖** 二上 あまの夜

あまやどり

俚云と因

六帖 二上

あまの夜

のこま

あまのえ

下二段

方一

願耻たる心也

材

裁れせしむる又裁き方

はらふにわくあまのえ **夕見** 二六 なまはし

あまのえ **六帖** 二上

あまのえ **六帖** 二上

あまのえ **六帖** 二上

寄生

末

理七枚 各契きりうるはもあま

あまのえ **六帖** 二上

ての心也

帯

二枚

あまのえ **六帖** 二上

あまのえ **六帖** 二上

あまのえ **六帖** 二上

あまのえ **六帖** 二上

あけくれ

明暮也

あけはし

業普樂

抄十一

はむのあけはしに仁和寺

の僧云

あけぐれ

秋の風んとて又響晴くある
さうよ

捨

難上 軽ほらけひらら声す

あけくれと人れつらん

因

意二

あけくれのさすをさすあけくれさすあけくれ

ぬまに

あけたつ

まき立秋立なるのまのぬ

古一 あけたつ

あけたつ

あけたつ

あけたつ

あけたつ

あけのなほふね

に証尺を引
てなほ舟の少舟也舟を

赤ら包をもちてあけのなほ舟と云

葉 舟は、楳のそふ舟、衝をさへ也、漢土の紅船を

万政解 三上十六 卷十四、金ふくにふの

舟を舟の毛に出んと有て、楳土もて塗らる舟也

さへ包をもちたるは、官船も、友人の舟もあらん

碓山あけのなほ舟を漕出せ、仲し、

都方の舟あけのなほ舟、

あけのなほ舟、あけのなほ舟、あけのなほ舟、

あけのなほ舟、あけのなほ舟、あけのなほ舟、

舟と同、万 三上十六、たひに、

あけのなほ舟、あけのなほ舟、あけのなほ舟、

あけのなほ舟、あけのなほ舟、あけのなほ舟、

あけのなほ舟、あけのなほ舟、あけのなほ舟、

あけのなほ舟、あけのなほ舟、あけのなほ舟、

あけのなほ舟、あけのなほ舟、あけのなほ舟、

あけのなほ舟、あけのなほ舟、あけのなほ舟、

あけのなほ舟、あけのなほ舟、あけのなほ舟、

あけのなほ舟、あけのなほ舟、あけのなほ舟、

あけのなほ舟、あけのなほ舟、あけのなほ舟、

野波布理不賜云々有也同トはありし後ハハ
はありし一後ハハ也玉為れ老におとしあふ
すすとり志らぬのよとりつることを全同ト義
也と云つり

あふす

履法令取也八玉夢也あふ
すすとり志らぬのよとりつることを全同ト義

あふす

淡路と云ふ所あふすの建りしる祠也
と云同尔同定也曰物法書におほきと云祠

是是也あふすの流れる事今因河之清

采に因按此説是之

万ハ四七 棹鹿の秋お貫おける玉白玉お佐和

に流の人かもるに巻んち同土三山城のくせ

若子が欲と云我れ狭を吾欲と云山城のくせ

あふす

無奥也細按伊勢家也
り七 尔危痛の事也と説るは

たふすのふおに云按コ四十クあつり

ハあふすのふおに云あふすのふおに云

に著聞集 義家朝臣永保の合戦の時

師の一言のふおに云あふすのふおに云

又義家朝臣宗任して自らせむるがうつほふ夫
をさしせけるを他の節もあはれくも
おはする物哉 洛人にあうたうとも本の意趣
いふなる物を恨をよじすまをさし
るるのあふれり世

あふる

字 梵

拾 物名 あつりの山あはれぬるやうを
のひまうしつひにあらん

あふい

逢期あつ逢時とらふん
期ハ字音をぬい古今にハ揚赤

かけつらつるも後撰心下つともなくつら
そ後のさよまある **古** 能浩人とあると
重にとほまひもあつとあつとあつと
うしけり **後** 五竹多一とあるはあつと
れよみ読うれやあつとあるらん **四** 道二
るのめもあつとあつとあつとあつと
るのめもあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつと

表 一方のあつと
葉 方がめるる

文選に左右をよも利便るぬあ徳来を訓
り又維楨をよむと云りハ重言は抄に

あゑ

下二返 あやうる也

うらほ

花葉 柱風枝まらある天女さて

うらほ 生れしつら子のあえむ山せし

ほ

秋風をあゆむ けら天らま

まをわのゆるふとそましく

後橋

天か

よつらの歌よあえくすぬ

金葉

連奇

きく あやうあもさふらん

六帖

こよ

ひらん人にあつたなほくよら

ほまにあえもこをすれ

後

秋 ああ

はなまはくつめにひとくたちめ

あさいあえすそまける 田意四も上

川海すにもあえすしなふねのくらうらも

あつるちのさう

あり

光也

少女

四七本

女房のさうしあつちあ

ひめをさけぞおほいしのことさうしめ

あつちあうけら

あてま

林

人の容免のうらま

あつちあてといふさうま

うらの弱めあ也 とうらに形容の詞也

あしんて

あしんて... 保田光則著... 雅言集覽續編卷之十八... 保田光則著

雅言集覽續編卷之十八

保田光則著

あのか

あさ

朝すべて夜も過れぬ夜の内なる
らも終るといふ常あり也古今集あさ

うりのまに近はう終るといいてとちめ

け系 写四

にぬけ夜ハとよめるなとにても知へ
カオのる終旁をーらていぬる物うとて
二系院ハ近けれハとてううならぬ祀にあほ

あて

あて... 保田光則著

あきをの

栲 涉くそのなきんうとつふしう
正也拾遺に云り **栲** 涉き也をの

助語也 あてその
なとて同

万葉集の字をあきをの也

よちをたつ

栲

字十七オ 打つけあきをのなり

西覽せられぬへきついでたれはんはハ

あざはる

四段活糾交をあらうあざはる
と云ハ俗之也又あざぬと云 **継体記**

勾大兄皇子法歌尔麻左桑^サ豆^マ羅^ラ多^タ企^キ阿^ア藏

播^ハ梨^リ **史記** 成敗之轉譬如^ニ糾^ル纏^ル

あさにつけ

朝に日に也朝につけたと古今以後
つるはあ

万四下六朝に日尔色付山のトららもの思ひす

くへき君にあらぬくに **回** 十二下 **カ** かく計こひ

つあらすハ朝につけぬ妹ふむらんつちにあひま

を

あさぼらけ

遠鏡 二十四 千秋朝 **朗明** の
畧也集中恋三志のめれ朗

と明ゆけハ是也 **古** 冬朝ほらけあめ月とみる

とに吉の里にふまゝ

あさたつ

雲霧霞鹿など不しハ朝立也人
にしハ朝立死にて朝旅をいふ也

○人にさるハ **古** あふさう朝たちとれハうぬめ

あざる

字鏡

尔醋、臭肉爛也。阿佐礼太

利と有

仁徳紀

四海人之苞直鱈

於往還云

鮮魚亦鱈

...

あさる

略求食と集

中尔考て...

...

あさる

...

...

あさる

...

あさる

...

あざる

畧

...

...

...

...

こひのめと

あさる

雑詔考

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

佐加保と名内是古訓也此等ハ和名抄字鏡にも不
人參を久未乃伊といふ類少てそを重き方より轉
れる名にて今世の俗にハ常多かるる也貞風集
雙木卷 櫻のをの哥亦わう北浦いさめりなん新原
のいとさ櫻うろろいにけりとあめもも櫻のを此あた
はらなき枝新うほの一むとハいひなせる也万葉卷十
三十五丁新果新亦肩咲鐘云々と云ハ前後芽子歌
の中に載たれハ芽子花を足つよめるにて新果を
括るよめるにハあらさる一古前にハかきよまによ
めるこれのまきも

あさかけ

朝影亦て朝日に人の糸の括を以ふそ糸
細長くすす枝瘦たる形に譬へて以り

朝日の糸を云ハ下に也す **万** 十一上 十一ウ 朝影に枝亦ハ

ぬぬかきろひのほのあにこゑていたしこゆゑに **同**

十一下 四ウ 新新亦枝亦ハぬぬから糸すそのあハすて久

一くなれハ **同** 十一下 十ウ 中ハ月夜曉闇の糸糸に糸

亦ハぬぬなをもいふぬに

○又枝糸の糸を新に足るをも云り **万** 十九上 廿長

ほそきまゆねを忽こまかり新新足つををあらか

手にとりもたるまを鏡

新新足つををあらか手にとりもたるまを鏡

あざな

祭字をよめり交名の義人にて交より呼べる名なれハ之後世の俗諺名をモカク云りよてあたちの義とも云り又田の名をあざなと云字の義なる一

宇治拾

二村三あざな袴どれとなんいれ川と云ふ

此ハ**同**

七四ウそれの因にさせるもたのき侍あり

あざなととなんいけを

松屋文集

下端いと

あくのる女りけりあざなをりきちとといけり

日十六ウに以我松のヤル疑波男あり折れり字を

三流とそいふ

松屋文集

上四ウ濤こる庵と云菴

郡氏名ハ猷字を寿元と云人のあざな也けり

寿元ハ

固

上八村柿園と云ゆるハ江口、方雄字を孫太郎と

云人の宿の名也けり日四十け屋のを坂上ノ義逸字後

三と云ゆるハくすしにて旭^三妻菴ノ友直字を林和

平太といふ人ハ相南麻ノ尚文、字を次布と云とそい

日三十枚ノ重御字を三布と云とそいふ

新なけふ

ふを西意にてちと云ふるふてあの新

古

あ新なけにみききみとし新あねハ名いとも

ぬる世まくらぬり**後**旋ニ土左新なけにあの

うきる浅忍いつて詠也まじと一ハへにけり

あざな

あさな夕な

畧解 尔ちハ助辞と寸矣冲宣也
ハ奥菜の菜とせり

万十一下四 以せ此あまの朝奥夕菜にかづくともあを

いの貝の片もひしして **古** 恋四以せ此答の朝な夕

なふのつくてふみさめにいとをあくよりしもう **玉**

秋下 **匡房** 時雨する以をたのむをくそ原朝な

夕船に色よりりゆく **拾玉** 二ちあてしこのあめのれ

ぬ色におくをを朝ねのふなふ打はらいりく

あさな夕な

なハにの通音か又朝な夕な畧解
の説のゆく助解この

万三下廿四 ちあてしこのそのまにもが朝旦あきひ下にとり

もちてこいぬひなけん **同** ちあてのこにてにとりもち

て朝なみれとも君代あくるとれし **同** 十二朝な

さ朝川の白くおくをのきえはともにとりし **同** 一君

ハ **玉系** 秋下 **匡房** 一とれする岩田のをの原

朝ねの赤色はよりゆく

あさらこの成物

あまやのと同

土佐 二月八日 あまらう成物もてきり

あねしとらうと寸

あざむく

稗 欺誑をいふ字後に諷。諷。諷。
譚等をよみ各抄に山雲をよめり

浅背^{シヤク}象^{シヤク}ぬへし俗^{シヤク}だますと云^{シヤク}是^{シヤク}なり何^{シヤク}の^{シヤク}あを
玉^{シヤク}と吹^{シヤク}くとよ^{シヤク}しを^{シヤク}雲^{シヤク}する^{シヤク}こと^{シヤク}いふ^{シヤク}甚^{シヤク}非^{シヤク}也^{シヤク}冷^{シヤク}艶^{シヤク}全^{シヤク}
欺^{シヤク}雪^{シヤク}の^{シヤク}句^{シヤク}え^{シヤク}つ^{シヤク}へし又^{シヤク}諫^{シヤク}字^{シヤク}を^{シヤク}も^{シヤク}刺^{シヤク}り
ぬ^{シヤク}き^{シヤク}お^{シヤク}き^{シヤク}て^{シヤク}わ^{シヤク}れ^{シヤク}は^{シヤク}い^{シヤク}の^{シヤク}む^{シヤク}阿^{シヤク}射^{シヤク}無^{シヤク}加^{シヤク}更^{シヤク}た^{シヤク}く^{シヤク}に^{シヤク}あ^{シヤク}
きて^{シヤク}あ^{シヤク}ま^{シヤク}ち^{シヤク}し^{シヤク}ら^{シヤク}し^{シヤク}め^{シヤク}古^{シヤク}是^{シヤク}蓮^{シヤク}葉^{シヤク}の^{シヤク}濁^{シヤク}り^{シヤク}に^{シヤク}あ^{シヤク}
ぬ^{シヤク}い^{シヤク}ゆ^{シヤク}て^{シヤク}何^{シヤク}の^{シヤク}ハ^{シヤク}あ^{シヤク}を^{シヤク}と^{シヤク}と^{シヤク}あ^{シヤク}ぎ^{シヤク}む^{シヤク}を^{シヤク}カ^{シヤク}ミ
ナオ^{シヤク}是^{シヤク}時^{シヤク}天^{シヤク}下^{シヤク}百^{シヤク}姓^{シヤク}不^{シヤク}願^{シヤク}遷^{シヤク}都^{シヤク}諷^{シヤク}諫^{シヤク}者^{シヤク}多^{シヤク}
天^{シヤク}智^{シヤク}紀^{シヤク}

あさらけ志

魚^{シヤク}亦^{シヤク}鱗^{シヤク}海^{シヤク}人^{シヤク}苦^{シヤク}於^{シヤク}屢^{シヤク}還^{シヤク}乃^{シヤク}棄^{シヤク}鮮^{シヤク}臭^{シヤク}而^{シヤク}哭^{シヤク}

芝^{シヤク}状^{シヤク}紀^{シヤク}十一^{シヤク}才^{シヤク}時^{シヤク}有^{シヤク}海^{シヤク}人^{シヤク}賣^{シヤク}鮮^{シヤク}臭^{シヤク}
之^{シヤク}苞^{シヤク}苴^{シヤク}獻^{シヤク}于^{シヤク}菟^{シヤク}道^{シヤク}宮^{シヤク}也^{シヤク}云^{シヤク}と^{シヤク}鮮

あさむ

本^{シヤク}者^{シヤク}以^{シヤク}い^{シヤク}あ^{シヤク}さ^{シヤク}む^{シヤク}の^{シヤク}條^{シヤク}ル^{シヤク}等^{シヤク}く^{シヤク}云^{シヤク}也^{シヤク}と^{シヤク}云^{シヤク}
雅^{シヤク}譯^{シヤク}キ^{シヤク}ヤ^{シヤク}ウ^{シヤク}サ^{シヤク}マ^{シヤク}ス^{シヤク}。ア^{シヤク}キ^{シヤク}レ^{シヤク}ル^{シヤク}若^{シヤク}菜^{シヤク}よ^{シヤク}め^{シヤク}て

あさみ

うつほ後蔭

天下^{シヤク}の^{シヤク}人^{シヤク}以^{シヤク}い^{シヤク}あ^{シヤク}さ^{シヤク}む^{シヤク}て^{シヤク}狭^{シヤク}衣^{シヤク}

あさこさわのせむふ

淡^{シヤク}松^{シヤク}中^{シヤク}の^{シヤク}お^{シヤク}決^{シヤク}ル^{シヤク}お^{シヤク}と^{シヤク}ろ^{シヤク}き^{シヤク}あ

更科

下^{シヤク}四^{シヤク}十^{シヤク}あ^{シヤク}い^{シヤク}ハ^{シヤク}た^{シヤク}め^{シヤク}て^{シヤク}し^{シヤク}こと^{シヤク}や^{シヤク}す^{シヤク}の^{シヤク}ら^{シヤク}を^{シヤク}い^{シヤク}

あさきあさきと笑^{シヤク}ひ^{シヤク}あ^{シヤク}さ^{シヤク}け^{シヤク}る^{シヤク}もの^{シヤク}と^{シヤク}も^{シヤク}あ^{シヤク}る^{シヤク}常^{シヤク}あ^{シヤク}る^{シヤク}

抄^{シヤク}ニ^{シヤク}人^{シヤク}ひ^{シヤク}と^{シヤク}り^{シヤク}の^{シヤク}い^{シヤク}ろ^{シヤク}を^{シヤク}き^{シヤク}る^{シヤク}し^{シヤク}き^{シヤク}に^{シヤク}の^{シヤク}あ^{シヤク}ら^{シヤク}ん^{シヤク}と^{シヤク}云^{シヤク}

人^{シヤク}と^{シヤク}あ^{シヤク}さ^{シヤク}こ^{シヤク}たり^{シヤク}

あさやけ

あさやけしと
あ^{シヤク}ら^{シヤク}ぬ^{シヤク}い^{シヤク}る^{シヤク}振^{シヤク}ち^{シヤク}る^{シヤク}に^{シヤク}名^{シヤク}連^{シヤク}の^{シヤク}い

そけをあきやけさせ給て

あざやく

寤せにあざやきて云

あざやの

紫日記 上 廿一ウ あきやのにうらじ **今昔** 卅十二上

卅七ウ 彼ノ浦ニ行テ **鮮** 鱧八隻ヲ 買取テ

あさよし **い物古意** 思のかけぬの甚まを云

れる昌煮 けしうらぬ本居怖おしの意 西山お徳中

橋 あきふに七あしきふにといひてけしうらぬき

ものつふれたふなをいふ意也 **以物** 卅七条 涉

おしう玄弟西せて **竹** 解ニ廿一かくあきまーく

もてくるをと云 **相壺** かくる人も世に出おする

お也けりとあきましまし目と怒るのしぬふ **夕見**

人比けをひ甚あきましく衆におほときて **祠を**

あきおしや君にきすへき雲深の衣の袖をわうぬら

す **金** 涉ましやこハ何ものさおそとよこひせよと

てもせれさうけり **千** 涉ましやまのこハいつに去な

比ぬきをちの橋のかけこころらん **同** 是七塔さそ

那昔の契をととふ物うら涉ましき **拾玉** 涉

ましやをさるるし山ちの志をとりとみれハ梢な
りけり **壬生** 歩ちしや歩きこいちに沈むみの
程うへさハ後なりけり **千** 歩ちしやおそる袖
の下ろる海のす急を人やうつらん **拾** さを席の
つめたふいちぬ山川のあさましきことぬ君来
拾玉 歩ましやちりりむをさしむまに志きこせつ
ますありも汲れを **壬生** 歩ましやたうるひよりちり
いちの山もなけきのおい初めけん **金** 山のぬれ岩に
る水ハ程みれハ歩ましけにしちりりにける **夕** 写
十七ウ入のけをいひと歩まししく来うにおほときて
楳 歩ましくとハ来かおほときこるるの志を

いなる詞也

あさまだき

挿 以抄 下十 **ま** ぐき の糸云里
は やのら **又** **ま** ごと山 **こ** いふ糸

さきおきてなるといふもなくべき時分のまこさくらぬ
糸おき出たる也 **接** け説末程ならす程まこきのまぶ
きハ未程の時分糸をならぬ糸をいふ起るるのまこき
の意にあらす **拾** 来 元良親王程まこきおきて
そみつる梅のむられまの風れうしろめたさに **千**
恋ニ右の大いおちち君程まこき糸をさなうら
さいめかる志づの袖とにかくハぬまこし

あさまだき

あさけの烟

朝食とく烟をと云

十題百首

後京極大なる川朝けの烟ほあつと下す

花のちとさかりゆく **新千** 妻上為飯打麿き

らそちあをを近の朝けの烟まやしらん

あさけのふけ

祭 朝食夕食のそ我也古す祀
の奇にえり獲養殖を削すへし

今も位深のその系るをのそにそは朝飯を上下

通志て朝けとつり **按** 神又天皇皇子なもとにハ

朝御食夕御食又朝乃大御饌夕乃大御饌

と申せり

あさける

嘲を削り字鏡に嗤をよむ浅けるの
我 へし **後拾遺** 序 近くさうふ

らいそくきく人月にあさけり風にあさむくる

と云す云く雲を月尔あさけり時多を風に秋く

也とつり

あさふ

祭 神代紀上 **サ** 財をよむと童蒙頌
顔に又をよめり雑へさふの意也と云

り俗尔あさふとあさるさつりさハ合せ交る家

へし **神代紀** 上 **サ** 悉く備貯之百机而御食之

あさふ

殊更び鄙び宮び荒びたのこの詞と同
くぶるの約詞ふて形容の辞なる

百六 廿四

ふちハあきびてせにうぬらん

あさてこぶすま

清てハた之の約なれハむむへし
者紀神代に和幣を尼柁底と

千載

麻てほす糸をとめのか

やむしろあきあいてもるすけうぬ ことしあり

君はとははにふれぬの床の上に麻てこぶす川
てこもをとれ

あきて

祭

明後日と云あま去て後の日と云我

也と云あり

接

俚言ハあきつてと云の

栄本の榮

抄三 今日あまの能にとやんとやほさ

すれハあきて佛にいとよき日なり

宇治拾三

あさてのぬらんとの日糸うとろけり

同五

うしろとめしゆてあきて是一人と涙らんといはま

に

あきあけ

梅園日記

あけハあききをとつふ今

ゆるハ壽合根合やとのた也

七玉集

家良山の

瑞と雲むとみゆる然あけルやうてふりぬるまゐの

新撰六帖

山のはにほそりせる夜ハ室の浦

赤明日ハしうとゆるみ人梅園日記是ハ夕あけに

やされハ新あけハる夕あけハ日ありと古くよりい
ふる語成へし

あさききもの

新の掃除也

拾

雑春 どのより此律の法奴心ありはけ共ハ

うり新きものすね

新千

妻下 三條入道

百歳のまほし此様ちりぬまに新清めせよとも
のまや同 誹諧 賀茂遠久 八らるる光彦

に交よりん新清めす於神のま川こ

あさめよし

祭

記に見えたり朝目好の義成へ

し今もいふ禱也といふ

あさきことり

浅緑をよみて色の落葉まなるをい
へり柳の萌初る色或ハ春の色やと

にもあり

古

妻上 涉路系より新て白雨河を玉ふ

もぬける春の柳

続古

隆信 浅きことり

りた石上ふるのにまよし三輪の神板

続千

賀有

家子日する山ねる原の浅きことり

新れる

拾五

上 若菜つむをちの深さの浅き

ことり

壬生

中 妻此ゆく

生の中へ此浅きことり

あさひこ

伊勢家苞

甘ウ あさひことり

るも宜しからずか茂翁と考ふ

をふ日の糸をやりし剣なしたどこうこひははれ
とく袖中抄にも或中にハあま彦とみて天の白
といふかちともいはれとく梅にこはもと神よの
昼目の奇にていつこにの詔つちあつんあさひとくさ
すやをあべのむさこのうにとありこる本於日於
さすや園べとるけんを於をいふ詞をいそてうし
わくしにやあふん中右記ふ嘉祥二年十月廿三日云
神楽薙枕之中。阿美於呂之上云所ハ阿美於所
之ト歌也於御前於呂之上云詞可避之故也云と
をを思ふに。時に取て歌ふ人の心とてうしわくし
成へし。於白子とけ於ぬへしされハ今大あつハ於ひ

ことあまんりハ宣すからすとつあ也

あさひかけ
可 於日於ふつけ格よりぬれ

とちあしか君りぬれとあのみぬ
たろたをるぬれ於日於さすや宮達ルキある白雪

あさすをせさく
清酒を造る詞也
記 中仲哀 阿佐 文哀勢

佐 紀 神功阿佐 綿塙 斎佐

あきのいろ
秋色

続古 秋下 權少僧都公朝 秋のいろをいかに

清三ん 常盤山時雨も雪もそのしとおもは **山家**

下 秋の色ハ風そゆもセル志きり出す志くれは言
を袂にそきく **続後** 秋上 大炊御門右大臣 以

計のと今秋吹風の才にまきて秋の色アルも来にけ。

う那 **玉葉** 冬 入道お太政大臣 神皇月精の

もさち庭の兼秋の色とハ言に思ひけん

あき にかなしふ

古 秋物ことに秋を思しきもさちつうるいゆ

を恨とおもハ **同** おく山もさちあさわけなくし

此もあきくとさきそ秋ハかたしき **同** うきも成おも

いつらねで万重のなまきこそわたま秋のおゆ **後**

秋中 秋のよハ人を志りめつゆとをかきなすこと

此ねふを鳴ぬ **右** 秋のよれぬるもしらす鳴むし

公わらこと物やかやしうらん

あき たる

万 五 廿六 梅むとれかきしてあそくとも河波を良

奴いはけふにきけり

あき 此もや

源氏に秋の色乃とも云えたり又秋
の名人など奇にもあり俊成は再皇太后宮大夫

禁 中宮を中せり長秋宮の意也

源氏に秋の色乃とも云えたり又秋

の名人など奇にもあり俊成は再皇太后宮大夫

とやうし時雲の上迄に思す月影を移の空にてこ
 るそ嬉しき **接** 俊成の家集を名移詠藻と
 以ふも此宮なりし故也 **新葉** 秋下中宮女法にて
 おまししくけさげぬをふの枝をならせ移さうけきハ
 嘉茶の院 君ハ早秋のやむに移さるべき程をねふ
 の色にこそしれ **六百** 夏か茂ぬ茶料移の名人
 五添て長閑に涙よかもの河名 **棠花** 以ゆき、美意
 光を月とそみゆる異作の以末き、移の空にハ
秋のたのこ

明石 如九 けものまけけ、秋れたのこ、移かりとさめ

街のよきひつむへきいぬの

あきたき

をきき、コサ五 せすはあきたきともありん

あぎとふ

四段

記 中 始為 **阿蘇** 比 **蜻蛉** 日記 あたのこま

とたてて代の手おもて代をとりの人れあぎとふ

よすれい

あぎら

俗ル以ふと同

紫字四一オ

あやうのあひのかふとあきれて後

ひらた

同

日四九ウ あらきりけりとあきれて

あきさめ

七境 光忠作これハをうききたとい
なりハ雲市説

あきどろ

略

志ころハ志ころにて物執する

意成へし

私

あきハ商物の象

清高を頻ルする也

一カ

七

四十

西の市にたて福めて

めならハすよりし絹の高自許里かも

あむむ

歩行をよめる

あむまい

歩を訓りあむその近詞也

行幸

十四オ 以とーうとくにおもちあむまいな

ど大位と心をんはたらいあり

あむぐ

又

あむがす

琴示

あむぐ意也と云り

勤の意也

赤染衛門家集

すらきのーりて此座のふそ六

いろふんありあむのさぞとれ

千

旌 名いうねあく

うれめてゆくさハあむく姓系に云ゆそ二ほる

拾 物若くもおほいほしのあるくとみへつらひ雲の
をらにとふにをありける **同** 日をしたかのをきふ
にせえとかまへとらるゝあめうすなぬすことるへし

あめ 下二段又あやす既出

あめ 血あめをのり **枕草紙** あせあめをんち

そする

あめのしたまうす **畧** まをすハ政を執申す
義なり

万 廿四九めでの書ル天の下奏しあひあの子と

同 二五十七長 我大君の天北下ヤ賜ハ

あめのまはしら **神代紀** 上五將巡天柱とみハ殿
の席柱也風をこころハ **立田風神**

祭祝詞 我御名者天が御柱乃命國乃御柱乃命

神代紀 上九故以天柱奉於天上也

あめつゆ 雨露也

新千 秋下入前中納言實住めくりあふ秋を

こそおそるあめ比真をうけし葉のさめつゆ

あめのまか 何れの天皇を指て中とて定まらうす
ハ詮熟名あして別名ル非るへし

解棟抄も云り 天ハ尊て云也 **万** 廿 かりこさや

あめのこかをとをわけつれハねのこししなあめりあひ
おして **古** 恋四 左にけさハ或人あめのこかと直
にの米女に給いけるとなんやす

あめいと **万畧** 皇都の人をさす左傳周の國の
人哉天人といふをさすを思われし

カ十八十七 **カ** 八十七 **カ** 八十七 **カ** 八十七
あまさるひなれやつこにあめ人のうく
こひすらハひけるさすあり

あめつちのちりあいの極 **略** 既天地の開かれしと
云に弟へて又依合人限を

と也 **カ** 二 **カ** 三十九 **カ** 七 **カ** 七
葦原の水穂の國を天地の依相の極
志ろしめ守神の命と

あめつちを袋ふぬふ **祭** 袋ふ糸狭衣に天地を袋
にぬいてとるハ母代りなり也

すえとるとしつハあめのかを胞として大八洲を生
給ふの送を成へし **晴** 陰日記 中書 天地を袋にぬい
てとするふいとをのしぬて次に牙にハミをかみそ

よハ我洋ふといんといハ云し 傍注云正月餅鏡に唱
めり哥にあめつちを袋にぬいてさいはいをりれても
たれハ男あめりあひ此哥をりつるなり

あめのつゆし **畧** つゆじハ春秋落くおく雲
をいふ **按** 雲霧も天よりおる

物故に天のと云あめの甘雨といふも同意

とひふへのらねハ末ハ往ル通ふ故に末ありかくはひ
 つるぢり
神代紀 一廿一 汝是惡神 **同** 一廿二 以手爪為吉爪棄物以
 惡事曾無息時 **同** 一廿三 以手爪為吉爪棄物以
 足爪為凶爪棄物 **履仲紀** 七ウ 則負惡解除善解
 除而出於長渚崎令被禱 **神代紀** 廿八 釀毒酒以
 飲之 **同** 二初 蠅聲邪神 **拾玉** 五 以ないしとるひ
 あまうはあまうをハあーにハあらてよしとこそえれ
 歩をまあり 俚あくと云ハ跣一舉足為跣
あし 再舉足為歩と云
紀三十 十一オ 一千歩内
 一歩をまあり 俚あくと云ハ跣一舉足為跣

あし

俚ハツふと回し又あまういと云と回

あし

今昔 廿六 ハオ 然るに中世の家なれハ是代といふ物ハ
 上に大成本を横ルといふ是なりけるが

あし

○雲のあし
○雨のあし

あし

○舟のあし
方 七ノ七十一 島つたふ是速の小舟かせありなる
 へたあむあふとハなしに

あし

久隊抄中のけく也芝に非す

古俳諧哥

まめなれとちよにそはよけくあるうめのみたれてあれとあーけくもなしし

あーさま

悪様也

紫日記

下

飯きたなき人あーさまにしてなし

あいつくる人あらは

總角

さうりともあーさま

知る心あらんやいと慰めたり

あー

あそこ也

差菜

上

け國の奥比郡小人と通ひ難く御

山を伐ほししめ置ながらありこに降りたる後

まゝ人にハ字治拾一廿六ニハいうにこをりとして山科

とこーつらひとしハあーとて岸山と云ぬ

あーをそら

是の爲付ぬをいふ心やなりと云心比爲つらぬを云也

紫日記

上

いこーのわややと云いつあーをそ

也同下ハオあるふふ不足と云るを系うたれハ

あーつき

維倍考ニ廿五同人又問末木集卷廿八為あーつきのもれあのお

のうけさるてさちあらうらるるのいけ水けあ初勺を或抄に蒼ふきの誤也といへるやと云て傳るの答をゆゆたり已夜を小屋に取なして蒼草

地名

とひくるならん但池尔ありつきとひくるあはれも
そ八万葉巻十七四十九丁 下三十一 をのこ川くれちるあはれふ
少女らり葦附とるとせふたすらしけふのあはれ
の自注に葦附海松之類也とひくる是をよめるか
ともろふやうなれとほからるる昔のうらひつゝのハ
ミえたり

あーだ

今俗に云も同

栄西よき

抄一ウ田あるしといふハ前云

あーたはきたり云々あやうきさままゝなる女と云
それといささかして是たをこのせたり

あまこのけ

新の儀饌也食ともかけり新け夕
けのけも同

祈年祭祝詞

皇御孫命能朝御食夕御食能

月次 詞に七かく

大神宮延曆儀式帳

朝大御饌夕大御

饌同外宮儀式帳

天照坐皇大神乃朝乃大御饌夕

乃大御饌乎日別供奉

是を捧るるの

あー系り

玉姫芳

サセオ

右近茂吉足系りよめ寸

あーて

水邊後草

巻二あーて新編

ふろくみゆる此あーてのゆ河院

市村の百首にありてらむ妙の垣の付るなげ
ともなれるきりやひきすともハ茅もて垣に池たる
を以ふにてありてと一七つふハ万葉集に麻をハ
麻手ともあるがぬへし扱けありてとふものき
さまたしりぬらす世も名を交へてこのくを茅もとい
人もあれと夫ハ名にして茅手にハあらさるへし
塵添塩囊抄巻五に和泉市ハ茅の好色たけける
にぬのこの取山をけけるに能と心合せられれ
ハ二倉開といふ名をとり取あてて茅もつひのあて
のうらむハこれハ難波のあ^徳華てぬらんとよめりあ
してとハ字にて陰となすと注せる物也と注せ

建物語をハに天皇ちまもとてあひけるに難波をこ
あふとて夕暮に難波波と名後セハ只萬葉のあり
てなりけりとなんとぞえしこと雨の夕への屋を
と難波のありてと見えんけふとぞねけりあふアの
葉夕暮の茅手にぬたるもやさしくぞえけりえし
拾五集に夕暮ハ難波波をけりやありてのうら
にのけるあつさともなふにありてのうらに
かけるとるハア字とこと物とせられともなふ
へし五二集に淡河橋難波と名て見後セハ波の
いろはのありてなりけりともこのあを交へると
物のやうぬれと茅もとの陰ハことわさぬれハ

源氏物語梅の巻の巻にありてその法をさしに
うけそのあはれ心ニホいとむけりけりこはれ
又回老にありてのさしにありてその法をさしに
おろしき宰お中納の法と又中勢集にありて
にてしら流るを以てそ稱ハ立ぬらし諸のありて
をよといはぬん **文々温故** 下巻十四 古昔葦手奇
繪とて我者比一併あり葦手の名ハ天徳四年の合
記拾送和奇集留尔又えその法の名ハ後撰和奇集
拾送和奇集留尔又えたり源氏物語云々さて葦
手ハ河海抄尔葦手とあり花鳥解情ありての色紫
ハあしの葉比に文字を考なり水石鳥などの

かゝにも考なりなり歌法ハ岷江入楚或註尔その法
とハやといハ夫をえにうき^カとといハ^カを考にと云
荷を陰尔也按る尔葦手をその法と比差別ハ是
まで大方ハ志らるる物うら五月雨記尔載る香墨の
陰尔その法を考て葦手といひけるなりその法を混
し記り傳へて遠尔分るならぬの如し近く考てて
いし葦手も今のちらしきの濫觴とす人々その法ハ
さしり陰の鄙俚ならぬおともいふへし

あゑの

コ あをいしき也 檜拾送に淡路國
の々名比平安を以て此字にて心持さ
のといふハもいハしきなりへけれと物語のあゑのハ

更に平安の意にハあらず用ゑる意のうつりやをれ
る故へし **栞** 亦あえりと回し意と少ゆまはえとを
とき **誤** ぬる故へし **夕** 字ユナオあやしく世の人に
似すあゑかにみえ給いしよも

あひふあひて

古恋五 あひふあひてぬるふ氏の赤袖ふやとる
月さくぬるしかほなる **赤元百首** 定為あひふ
あひて秋田かりほす氏の戸もにきをひるける國そ
とらるる

あいたる

夕兒 ああものこなれハとてさすかにうちりさけ
ぬさまいとあひとれたる **注** あまたる心なり

あいなだのそ

細 けはれハは末枝なり **師** け末枝く志枝も元
え身らんとおとそと也 **差菜** 下 コ百ニウとちかくて

るす月日ハ心のどかにあいなだのそとして心としも何
くぬ心志なれと **帰** コ十九 あひなると此ハ心とくる
しくなんまへけれ **栞** **細** かいちりおと云心也
あちきなき心なり **栞** 凡て此詞ハ以てにあらんも

知能きり末のるををを疾つむなくれにるる
也 **葵** 四四計さりともしつひおはとあひなごのめし
侍るを

あいきる

記傳 六三 オモシメテヒミツク 欲相見の相字逢の意
に見べし

あいたい

古今正義 相返相老などの説し何
れといつる所記あひおいとハ小松の生合

也昔の友とあふ心也ま **伴材** あひおひハお生也俗
と常にいつて也 **志孝家集** 履風に子の目此而
二葉よりお生してまてし **の** 今今日お生りける中
の小松に **新古今** 大貳三位 お生の小松比山の小松

はら今よりあ世の形をまごん **拾遺** 安法く師
あまくまあま人神のあひおいをまごる **の** 後
のま **古今** 序 言砂の伝者比松もお生のや
に覚え

あいたけ

梅 ろろくあひ竹といひし **の** 覚え
すは竹と竹と招合福に近き

いせたらを云ぬへし風なるとつて招合時ハ友すりの
るる事萩の友すりなごのめくぬへし **の** 覚え
笛箏算葉などの類も竹と竹とのこも **の** 覚え
丸の善にもあて **の** 代のるるを河へま **の** 覚え
や **の** 代のるるをた **の** 代のるる **の** 覚え

やうなりされと只万物のさうとしてハ契大返年意
ゆは分 **新題林** 雑上 竹契 遊年 雅朝 治め
しる君と臣とのあひ作ふる万のさうとをあらうそふらへ

あいだ

あもごど

畧 あもハたも同くあもごどハ
母ノ自なり

一カ上 廿四 **阿母**乃 **自母**たまにもかちやいたきて
えららのなまにあもまのま久も

あす

下ニ位

一カ上 廿三

いさかこのあもれさくめうひもふねのさそ
一 言津ハ **あ**けけるも **後** 秋上 りふらうハあまのか

いらハあをなんそこいともなくたわたりなん **添**きり

つほ **む**すいつるんそふきもとゆいふこきむさきあ

いり **あ**せすハ **同**をとめ うくひすのむりーを

こいてさいつるハこつたふむのいろやあをたる **同**やとま

あもにあへすかれルーその兼なんと御の色ハあを

すもあるうな **一カ**十六ノ三 ちなうしの池ーうら

めーわきもこのきつ、かつのき水ハ **潤**なん **新**初

山ハさけうみハあをなんふなりを君ふるふく心あ

あらめやし **棟** 幸くれていはるれえらも来とち

みしんうけのあせと行来 **赤深橋** あせあけり

今たにのる流つせのをやくそ人ハみるへうりける

堀太 堀のをとら苗代垣とあせ並て今日そたなる

種おろしつる **山家** 下 つをぬく水ゆりのち原あせ

あけハんすこれそ生かりける **堀百** あせおける

名あそとも此東の神ふすこれつむとて人うりも

くらしつ

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

